

1 はじめに

本研究の目的は、反対語に対する日本語話者の意識を総合的に考察し、それによって、通常の日本語話者が考えている「反対語」について明らかにすることである。

今までの反対語の研究史については、すでに文献[1, 2]で40点ほど取り上げて記したことがあるので、ここでは詳しくは述べない。その後、雑誌「日本語学」で「対義語」の特集をやっている[3~9]が、他にこれといった論文も見当たらず、研究上の大きな発展はないといってよい。

2 一般の日本語話者の意識をたずねることの意味

本稿では、学生多数を対象にした意識調査の結果を基に、反対語を考察するが、まずは、このような調査を行なうことの意味を明らかにしよう。

今までの反対語の研究では、「反対語とは何か」をそれぞれの研究者が自分なりに定義してきた。そして、そのようにして取り出した反対語群の中を調べて、その中に性質の異なるいくつかのグループがあることを明らかにしてきた。

このような「研究者の目」から研究対象を見ることも重要であるが、言語は多くの人によって実際に使われるものであり、言語使用者が言語に対してもつ「言語意識」も重要である。「意味が反対だ」ということは、どのようなものとして一般に意識されているのだろうか。これは、意味論の研究者がいうところの「意味の対立(opposition)」とは別物である。研究者も言語使用者の一人である。研究者は、一見もっともらしく「意味が反対だ」ということを説明しようとする。しかし、その説明は、まずは言語使用者としての言語意識が先にあり、それを他人にわかってもらえるように述べようとしているにすぎないということである。簡単にいえば、反対語研究の基礎にある「意味が反対だ」ということは、研究者が論理的に完全に定義することはできず、結局のところ言語使用者の意識の問題になってしまうのではなかろうか。

今までの反対語の定義を振り返っても、このような状況は容易に確認される。たとえば、『国語学大辞典』（東京堂出版）の同義語・対義語の項目で、対義語は「なんらか

の意味的特徴を共有しながら、ある点において対立する関係にある二つ以上の語」と定義されている。しかし、これでは不十分である。「赤」という色（有彩色）を考えよう。これとは違う色はたくさんあり、「青・紫・緑・黄色・ピンク・……」などと列挙することができる。それぞれ「色調」という点で「赤」と対立がある。では、これらのすべての色を表す語が「赤」の反対語だろうか。そうではないと考える人が多いはずだ。「青」は反対語に考えられるが、他の色はそれほどでもない。これは単に色環上で「青」が反対の位置にあるということではない。赤の補色は青緑である。反対語は、「意味の対立」で説明できるものではなく、「意味が反対だ」といわなければならないものである。

では、なぜ、多くの色の中で「赤」と「青」が対比的に取り上げられるのだろうか。ここは、それを詳細に述べるところではないが、「赤鬼－青鬼」や「赤シソ－青シソ」のように、多くの「赤－青」の対立を有する複合語の存在も影響していると考えられる。（他にもたくさんのファクターが考えられる。）

それはともかく、多くの日本語話者は、「赤の反対語は青だ」といわれると納得してしまう。そして、同様に、「『男』と『女』や『高い』と『低い』のように意味が反対になることばを反対語といいます」といわれると納得してしまう。お互いが納得している限りにおいて、例を示されてもわかるし、反対語はそんなものだということになる。しかし、根本に立ちもどって考えてみると、これは「意味が反対だ」ということを、例を通じてお互いに納得し合っているだけであって、まったく説明していないに等しい。ある人があるペアについて「意味が反対だ」といい、それ以外の多くの人が賛成する（異を唱えない）というだけのことである。

「意味が反対だ」ということは、このように、意味論的に厳密に規定されるのではなくて、普通の言語話者が直感的に持っている言語意識にのっとなって規定されると考える。

だとすれば、普通の話者が持っている「反対語意識」（あるペアの語が反対語だという意識、つまり二つの語の意味が反対だという意識）がどんな構造になっているのか、それを解明し、そこから反対語の性質を調べていくことも可能ではないかということになる。意味論的なアプローチというよりは、認知心理学的アプローチといってもよい。

このように、一般の言語使用者の意識を中心において、それがどのようなになっているのかを明らかにすることは、反対語の性質を調べるのに有効な手段であると思えるが、今までの研究では、このような調査に基づく反対語研究はほとんどなかった。逆にいえば、今までは意味論的研究だけが行なわれていて、認知心理学的な研究がなかったといってもよい。

本研究は、このようなことを考慮して、多数の学生を対象にした意識調査を研究の手段として用いることにする。

### 3 調査の方法・経過

荻野と野口で相談した結果、反対語辞典の調査[2]の中から性格が異なるとされる反対語のペアをひろいだし、それが反対語かどうかをたずねるアンケート調査を行うことになった。こうして「反対語らしさ」を求めることにより、反対語の構造がつかめると思ったわけである。

いくつかの仮説を考え、項目を決定し、1986年4月から5月にかけて埼玉大学の学生を対象に予備調査を行った。それによって質問の量を調整し、30分くらいで記入できるようなものにするとともに、項目の追加と削除を行い、反対語意識をつかむのに、よりふさわしいものにした。

アンケートは二つの部分からなる。PART1では、多くの反対語（ただし、反対語ではないものも含む）を左右に並べて提示し、それぞれが反対語かどうかをたずねた。PART2では、ある単語を提示し、その反対語を自由に記入してもらった。

アンケートにはAバージョンとBバージョンとがあり、両者では質問の内容が違っている。PART1では、AとBで反対語のペアの提示のしかたが左右逆になっている。PART2では、反対語と考えられるペアのそれぞれ一方を提示している。

本調査は1986年6月から7月にかけて、東京学芸大学、東京外国語大学、明治学院大学、聖心女子大学の4大学で協力者を得て行うことができた。それぞれの大学の教室で学生に対してアンケート用紙を配布したが、その際、あらかじめアンケートの束の中はAとBとが一部ずつ「たがいちがい」になるように重ねておき、回収数がAとBとで同じになるとともに、AとBの配布が偏らないように注意した。それぞれの回答者にはランダムにAかBかが渡ったことになる。

回収後、コピー作成時点のミスにより、記入が不備だったものが2通出たので、それらは排除した。PART2の回答はそのままコンピュータ入力するには不便なので、野口がコーディングして、すべて数字に置き換えた。その後、荻野が微調整した上でデータ入力を外注した。その後のコンピュータ回りの仕事と分析は荻野がおこなった。データの集計には荻野が開発したパッケージ・プログラムGLAPSを使った。

#### 4 調査対象者

回答者の分布は表1の通りである。

表1 回答者の分布

	合計	性別		年齢							
		男	女	18	19	20	21	22	23	24以上	
東京外国語大学	89人	24	64	0	5	48	20	10	3	2	
東京学芸大学	48	11	37	0	20	26	2	0	0	0	
聖心女子大学	13	0	13	0	0	0	9	3	1	0	
明治学院大学	116	57	59	18	28	17	14	10	17	9	
合計	266	92	173	18	53	91	45	23	21	11	

※性別の不明が1人、年齢の不明が4人いる。

表2 二つのバージョンの分布

	合計	大学				性別		年齢						
		東京外国語大学	東京学芸大学	聖心女子大学	明治学院大学	男	女	18	19	20	21	22	23	24以上
A	133	42人	24	8	59	43	89	9	26	42	26	13	8	7
B	133	47	24	5	57	49	84	9	27	49	19	10	13	4

二つのバージョン（AとB）の分布は表2の通りである。ほぼ均等に二分されていることがわかる。

この他にアンケートでは外国生活経験もたずねたが、1年が9人、2年が2人、4年が3人5年が1人であって、日本語に対する影響はまず心配ないと判断して、特別の配慮はしなかった。

#### 5 反対語らしさの構造

アンケートのPART1では165個のペアに対して「反対語らしさ」をたずねた。

「大きいー小さい」とか「表ー裏」のような、意味が反対になるペアを反対語といいます。では、次に示すペアは反対語でしょうか。確実に反対語だと思う場合は1を、反対語だと思うがやや自信がない場合は2を、迷う（わからない）場合は3を、反対語ではないと思う場合は4を、○で囲ってください。なお、ここでは、必ずしも単語でなくても（文であっても）反対“語”と考えることにします。

このように、質問文では「反対語」の厳密な定義を示さず、例示して説明するにとどめた。それぞれの回答者の反対語意識を抽出するためである。

### 5-1 記入の個人差

当然ながら、各自の判断に偏りがあるが、アンケートの中に記入がいかげんになされたものが含まれる可能性がある。そこでまず、PART1の回答全体165個を個人ごとに集計してみた。反対語を最も多く認定したのは個人番号141028の回答者で、「確実に反対語」が118個、「たぶん反対語」が14個、「反対語ではない」が33個であった。実に8割が反対語だと判断している。一方、最も多く反対語でないと認定したのは、個人番号241028の回答者で、「確実に反対語」が5個、「たぶん反対語」が6個、「反対語ではない」が154個であった。実に9割以上が反対語ではないと判断している。あとの人はこの中間に位置するわけである。両極端の二人の回答をみても判断が画一的ではなく、また、あとの264人の回答も両者の中間に切れ目なく連続的に分布していることから判断して、一応いかげんな回答はなかったと考えられる。これは、アンケートの配布が授業中であり、授業の担当の教官から直接配られた（また、一部ではアンケートに学生証番号を記入させた）という事情が効いていると思われる。

### 5-2 反対語らしさの測定

回答は4段階で示されているが、それらの間の差はどうなっているのだろうか。もしも、4段階の回答それぞれの間のちがいが等しければ、反対語らしさは4段階の回答の「平均値」で求められる。それでいいかどうか、検証してみよう。

AとBの二つのバージョンを区別し、165項目の4段階の回答をまとめると、 $4 \times 165$ のクロス集計表が2枚できる。それぞれに対して荻野の数量化の方法[10]を適用して四つの回答の位置を求めてみよう。位置を表わす値（数量化の結果の値）を「確実に反対語」・「たぶん反対語」・「わからない」・「反対語ではない」の順に1.00から4.00の間に変換して示すと、バージョンAでは1.00、2.02、3.14、4.00となり、バージョンBでは1.00、2.07、3.20、4.00となった。「わからない」の値がやや「反対語ではない」に近づいているが、全体にはほぼ等間隔になっていると判断してよい。なお、このような検証法の妥当性および理論的背景については文献[11]を参照してほしい。

以上の結果から、「反対語らしさ」はそれぞれの回答の単純平均で表示しても大きな問題はないと考えられる。

### 5-3 AとBの差

アンケートにAとBという二つのバージョンがあったことは前述の通りだが、それらの間には差があるのだろうか。

「反対語らしさ」を、5-2で述べたように、回答の平均値で表わすと、バージョンAとバージョンBのそれぞれに対して平均値が求まる。その差があるかどうかを検定してみよう。ここではt検定ではなく、AIC[12]の手法を用いた。その理由は、(1)二つの標本分布の分散のちがいがあっても統一的に検定できること、(2)標本が母集団からのランダム・サンプルでなくとも、二つの標本分布のちがいで、それを一つの分布としてあつかうべきか(二つの平均値に差がないということ)二つの異なる分布としてあつかうべきか(二つの平均値に差があるということ)が判断できるからである。

なお、ここでは、2×4のクロス集計表に対してカイ二乗検定を行っても同じ結果になる。差があると判断されたものを表3に列挙する。表3に示す「反対語らしさ」は数値が小さい(1.0に近い)ほど反対語らしくなり、大きい(4.0に近い)ほど反対語らしくなくなるような値である。

表3 バージョンAとバージョンBの差

項目番号	質問項目	バージョンA		バージョンB	
		反対語らしさ	大小判断	反対語らしさ	質問項目
021	激痛-鈍痛	3.30	>	2.99	鈍痛-激痛
036	与える-取る	2.44	>	2.16	取る-与える
043	開票-投票	3.67	>	3.38	投票-開票
044	月利-年利	3.94	>	3.79	年利-月利
045	結婚-離婚	1.84	<	2.08	離婚-結婚
047	公共心-利己心	2.03	<	2.28	利己心-公共心
050	あまい-からい	1.97	<	2.30	からい-あまい
052	怒り-喜び	2.35	<	2.69	喜び-怒り
054	覚える-忘れる	1.65	<	1.87	忘れる-覚える
062	以前-以後	1.28	<	1.46	以後-以前
095	上-下	1.02	<	1.11	下-上
133	<歩いて>-<走って>	3.77	>	3.56	<走って>-<歩いて>
145	<代筆>-<自筆>	3.39	>	3.01	<自筆>-<代筆>
153	<ゆっくり>-<はやく>	2.61	>	2.19	<はやく>-<ゆっくり>
156	<歩く>-<走る>	3.67	>	3.51	<走る>-<歩く>

最後の四つのペアは、実際は文脈がもっと長い点に注意してほしい。

さて、この結果から何がわかるだろうか。まず、165個のペアのうち、150個はまったく差がなかったということであり、被調査者に反対語のペアを示す順序は、たいの場合あまり大切なものではないということである。

しかしながら、ここに示した15個は「反対語らしさ」に差が出た。これはつまりペアの提示の順序が「反対語らしさ」の判断に影響しているということである。その場合、

アンケートの様式からいって、被調査者はペアの左側の語を先に見て、それからその反対語としてペアの右側を見たと推定される。そこで、被調査者は左側の語の反対語として右側の語が妥当かどうかを判断したと考えよう。これで説明できるペアも多い。

上のペアのうち、項目045から095は、AバージョンのほうがBバージョンよりも「反対語らしさ」の数値が低い。これらの多くは数値自体が小さく、だいたい反対語と考えられているペアである。そのようなものは、Aバージョンでは反対語と考えられても、その順序を逆転すると、他の表現を想起してしまい、反対語とは考えられなくなるのだろう。すなわち、項目045では、「結婚」の反対語としては「離婚」がすぐ思い浮かぶが、「離婚」の反対語というと、「結婚」だけでなく、「再婚」のようなものが思い浮かぶ人も多かったにちがいない。また、項目047では、「公共心」の反対語は「利己心」になりそうだが、「利己心」の反対語は、と考えると、「利己」の反対語の「利他」やら、「利己主義」の反対語の「利他主義」やらが連想されて、「公共心」と判断する人が少なかったのではないか。項目050の「あまい」と「からい」は、本来ちがう味覚を表わす言葉で、「意味が反対」というのではないのだが、態度や評価の修飾語としても用いられ、その意味では「意味が反対」といってもよかろう。「あまい」の反対語は「からい」と意識する人が多いが、「からい」の反対語となると、「あまい」を意識する人が少なくなる。プラスの意味の「あまい」に対してはマイナスの意味の「からい」が反対語になるが、マイナスの意味の「からい」に対しては他のマイナスの意味の単語（「にがい」や「しょっぱい」）も反対語と意識されることがあるのだろう。また、「あまから」という単語の存在も影響していそう。項目052の「怒り」と「喜び」は、この順序だとやや反対語らしいが、「喜び」と「怒り」となると反対語らしくなくなるのは、「喜び」の反対語として「悲しみ」（これは項目087でたずねているが）を考えた人がいることをうかがわせる。項目054では、「覚える」の反対語は「忘れる」となるが、「忘れる」の反対語には「思い出す」も考えられよう。

これらに比べると、項目062「以前」－「以後」と項目095「上」－「下」のペアはその理由を考えることがむずかしい。これらのペアは「方向が反対」ということで、かなり「反対語らしい」ものである。「前後」とか「上下」とかの単語の存在が影響していることもあるかもしれないが、それだけではなさそう。というのは、たとえば、項目001では「愛憎」、項目002では「新古」、項目006では「正誤」のように、反対語どうしが結びついた単語があっても、それらではAバージョンとBバージョンの反対語らしさの差はないのである。これらと「以前」－「以後」・「上」－「下」のペアの差は、現在のところ、不明であり、今後の課題といわざるをえない。

さて、項目021から044は、いずれもAバージョンのほうがBバージョンよりも「反対語らしさ」の数値が高い。これらの多くは数値自体が大きく、だいたい反対語と考えられていないペアである。これらも他の語の存在などで説明できよう。項目021では、「激痛」は「激しい痛み」であり、「激しい」の反対は「おだやか」であるから、「痛みがない」という意味の単語が反対語になるのだろう。一方、「鈍痛」となると、これよりは自然に「激痛」が出てきそうである。項目036「与える」では、反対語として「奪う」を考える人もいただろう（これは項目014ですでにたずねている）。「取る」に対しては他の反対語を考える余地が少ない。項目043では、「投票」してから「開票」という行動の順序性があるので、「投票」－「開票」は反対語と受け取られやすいが、「開票」－「投票」はそうはならない。項目044「月利」と「年利」はほとんど反対語ではないのだが、「年利」－「月利」の順で提示すると、「年月」という単語のささえがあるためか、ごく一部の人が反対語と受け取るようである。

これらの単語群に対して、項目133から156は文や句を提示しており、意味が複雑になっているので、そこに見られるAバージョンとBバージョンの差を分析するのはきわめてむずかしい。ここではこれ以上ふれないことにする。

#### 5-4 男女による差

反対語のような言語意識は、言語体系の内部に関することなので、日本語話者全体に共通する部分が多く、回答者がどんな人かによって変わってくることは比較的少ないと考えられる。この点、社会言語学で研究されてきたような「言語行動」や「言語行動意識」などとはちがっているだろう。

これを確認するために、まず、男女差を調べよう。バージョンによる差はここでは無視して、いっしょに扱うことにする。男女で各バージョンはほぼ同数ずつ調査しているから、いっしょにしても問題ない。表4は男女で「反対語らしさ」の平均値に有意な差のあるものを並べたものである。項目は、女の反対語らしさの数値に従って配列した。

表4を見ると、大小の判断の方向に一つの傾向が見える。「反対語らしさ」の値が小さい、多くの人が反対語と認めるペアの場合は、女の反対語らしさの値のほうが男より小さいということである。また、「反対語らしさ」の値が大きい、多くの人が反対語と認めないペアの場合は、女の反対語らしさの値のほうが男より大きい。すなわち、女のほうが反対語の判定については正確なことが多いということである。

なお、大学別の集計の詳細は省略するが、一般に大学間には（入試の難易度という形で）かなり学力差があることが知られている。大学間の差はそれをほぼ裏付ける形で

(男女差と同じく反対語の  
判定の正確さという形で)  
あらわれたことを記してお

く。もしかすると、男女差  
の一部は大学差である可能  
性がある。表1で見たよう  
に、大学によって男女の構  
成比がちがっているからで  
ある。

ところで、「確実に反対  
語」・「たぶん反対語」・  
「わからない」・「反対語  
ではない」のそれぞれの回  
答の数(165項目につい  
て)をひとりごとにカウン  
トし、それを男女別・大学  
別に集計してみたが、それ  
には差がなかった。したが  
って、一般的な傾向として  
「反対語と認定しやすい」  
という意味の偏りはない。  
あるのは、上述のような項  
目ごとの男女差・大学差だ  
けである。

表4 男女で反対語らしさに差があるもの

項目 番号	反対語のペア (バージョンAの例)	男の反対 語らしさ	大小 判断	女の反対 語らしさ
095	上-下	1.15	>	1.02
003	浅い-深い	1.16	>	1.03
016	上がる-下がる	1.17	>	1.03
068	大きい-小さい	1.17	>	1.03
102	大-小	1.18	>	1.05
024	新しい-古い	1.17	>	1.06
088	勝つ-負ける	1.18	>	1.06
006	正-誤	1.20	>	1.07
071	広-狭	1.29	>	1.10
035	売る-買う	1.33	>	1.10
094	始め-終わり	1.33	>	1.10
106	広い-狭い	1.30	>	1.12
097	内部-外部	1.34	>	1.15
039	遠ざかる-近づく	1.43	>	1.22
038	あく-しまる	1.50	>	1.27
066	集中-分散	1.54	>	1.33
150	でっかい-ちっちゃい	1.56	>	1.34
105	冷やす-暖める	1.64	>	1.35
056	異なる-同じ	1.60	>	1.37
018	天-地	1.61	>	1.40
027	生きる-死ぬ	1.73	>	1.41
034	先輩-後輩	1.88	>	1.55
061	縦-横	2.02	>	1.60
082	怒り肩-なで肩	2.64	>	2.31
058	一部-全部	2.81	>	2.34
046	迂回-直行	2.72	>	2.41
092	一次元-多次元	2.89	>	2.55
114	息子-娘	3.10	>	2.81
126	ちょっと-じっくり	3.25	>	2.82
098	片手-両手	3.40	>	3.16
151	青二才-年寄り	3.50	>	3.19
008	液体-固体	3.10	<	3.34
134	<歩きました>-<走りました>	3.27	<	3.57
007	液体-気体	3.50	<	3.69
099	うすみどり-ふかみどり	3.54	<	3.75
133	<歩いて>-<走って>	3.49	<	3.76
111	大豆(ダズ)-小豆(アズキ)	3.72	<	3.89

また、「反対語らしさ」の数値(全体の平均値)から各個人がどのくらい隔たっているのかを計算し、大学別・男女別に平均値を計算してみた。この計算法でも、女のほうが男よりも「全体の平均」に近いという結果が出た。

## 5-5 品詞による差

反対語というものは、単語の間の関係の一種であると考えられるが、実は「単語」間の関係というよりも「概念」間の関係といったほうがいいものである。概念というものは単語の文法的な性質を表わす「品詞」とはまったくちがうものであるから、品詞が違

っていてもその間に反対語関係は成り立つものと考えられる。

たとえば、005「有る－無い」の反対語らしさ（PART1の回答の平均値）をみてみよう。バージョンAでは1.09、バージョンB（無い－有る）では1.13、両者を一緒にしたときは1.11である。このようにほとんどの人がこのペアを反対語だとしている。

しかし、一般的にはそうではない。「新しい」に対する反対語は「古い」であり、「新」に対する反対語は「古」である。「新しい－古」・「新－古い」は反対語として扱われることはない。そこには、「ある単語の反対語は、概念の反対のもののうち品詞が一致するものであり、品詞が一致するものがない場合だけ、他の品詞のものが反対語とされる」という原則が認められる。

さて、では一体「新－古」と「新しい－古い」は同じ関係にあるのだろうか。もしそうだとすれば、両者の「反対語らしさ」は等しいはずである。以下ではそれを調べてみよう。両者の「反対語らしさ」は次のようである。

002 新－古 A=1.23, B=1.16, T=1.20  
024 新しい－古い A=1.10, B=1.09, T=1.10

ここで、左端は項目番号、「A=」の次にある数値がバージョンAの平均値、「B=」の次にある数値がバージョンBの平均値、「T=」の次にある数値が全体（AとB）の平均値である。A、B、Tのそれぞれの数値ともわずかの差がある。これをA I Cで検定すると、AとTに有意差があり、Bではそうはいえないことがわかる。結果がさまざまであるが、002も024も二つのバージョン（AとB）を比べたときに差が出なかった項目であることを考慮すると、AとBをいっしょにして考えることができるわけであるから、全体（AとB）を中心に考えるのがもっともよい。したがって、このペア「新－古」と「新しい－古い」は反対語らしさがちがっている（「新しい－古い」のほうが、より反対語らしい）と考えられる。

さて、この0.10という差はどの程度のものなのだろうか。バージョンAとBとをいっしょにして作成した項目番号002と項目番号024のクロス集計表を見てみよう。

表5 「新－古」と「新しい－古い」の回答のクロス集計表

		新しい－古い				
		確実に 反対語	たぶん 反対語	わから ない	反対語で はない	合計
新－古	確実に反対語	2 3 3	5	0	0	2 3 8
	たぶん反対語	1 1	3	0	0	1 4
	わからない	0	3	0	0	3
	反対語ではない	4	3	0	4	1 1
合計		2 4 8	1 4	0	4	2 6 6

表5のように、9割の人が両者とも確実に反対語だといっているわけで、その意味では大きな差があるわけではないのだが、「新しい-古い」は確実に反対語だとしながら、「新-古」は反対語ではないとするひとが4人いたことが差を形成しているといえそうである。

では、このような方法で類似の関係にあるペアを比較してみよう。有意な差があるかどうかは初めの行の右方に「=<>」で表示してある。「=」は差がない、「<」は上のペアのほうが下のペアよりも反対語らしい、「>」はその反対に下のペアのほうが上のペアよりも反対語らしいということを意味する。

023	浅-深	A=1.15, B=1.14, T=1.15	>003
003	浅い-深い	A=1.07, B=1.08, T=1.08	
071	広-狭	A=1.16, B=1.18, T=1.17	<072, =106
072	広げる-狭める	A=1.39, B=1.45, T=1.42	>106
106	広い-狭い	A=1.18, B=1.19, T=1.19	
102	大-小	A=1.08, B=1.11, T=1.09	<103, =068 (=123)
103	大きくする-小さくする	A=1.41, B=1.31, T=1.36	>068
068	大きい-小さい	A=1.09, B=1.08, T=1.08	
123	大きい-小さい	A=1.14, B=1.14, T=1.14	
(※068と123に同じものを入れた。068=123となり、データの信頼性が確認された。)			
069	冷-暖	A=1.46, B=1.41, T=1.44	<070, <104, =105
070	冷たい-暖かい	A=1.62, B=1.68, T=1.65	<104, >105
104	冷たさ-暖かさ	A=1.95, B=1.84, T=1.89	>105
105	冷やす-暖める	A=1.46, B=1.43, T=1.45	
095	上-下	A=1.02, B=1.11, T=1.07	=016
016	上がる-下がる	A=1.07, B=1.09, T=1.08	
(※095「上-下」はバージョンAとBとで有意差があったが、095と016の比較では、A、B、Tともに「=」だった。)			
001	愛-憎	A=2.10, B=2.06, T=2.08	=053
053	愛する-憎む	A=1.86, B=2.05, T=1.95	

ここに並べたペアは、「反対語らしさ」が1.07から2.11を示し、ほとんどの人によって反対語と意識されているものであることがわかる。有意差の有無はさまざまであるが、それら全体をながめると、我々の認識のしかたが浮かび上がってくる。

「上-下」と「愛-憎」以外の、「新-古」、「浅-深」、「広-狭」、「大-小」、「冷-暖」はいずれも状態をあらわす概念である。そのようなものは形容詞（意味的にももの性質・状態を表わすことが多い）との結びつきが高い。概念自体が形容詞性を帯びていると考えてもいい。したがって、形容詞の形をしたペアが最も反対語らしいと判断される。この例外は「冷-暖」であるが、これは反対語らしさの数値が高く、典型的な反対語とはややちがった性格があるようだ。

ところで、漢字一字で表わされる語は、語基であり、また他の多くの単語の造語成分として働くものである。そこで、これは形容詞とおなじように反対語として意識される。「新-古」や「浅-深」のように、形容詞のペアよりも反対語らしくないと判断される場合もあるが、その差は大きくない。

これに対して、「広い-狭い」に対する「広げる-狭める」や「大きい-小さい」に対する「大きくする-小さくする」は典型的な反対語ではなくなってくる。動詞は（この場合）形容詞から「作られた」ものだからであろう。

この例外はやはり「冷-暖」のところである。ここでは「冷やす-暖める」という動詞のペアのほうが「冷たい-暖かい」という形容詞のペアよりも強く反対語と意識されている。ただし、「冷たい-暖かい」に接尾辞の「-さ」が付いた名詞形「冷たさ-暖かさ」は形容詞形よりも反対語らしくない傾向がある。

以上とちがって、「上-下」と「愛-憎」はもともと状態を表わす概念ではない。「上-下」はその性格がよくわからない（副詞的か？）が、「愛-憎」は動作をあらわす概念である。そこで、「愛する-憎む」と差が出てこない。「上-下」と「上がる-下がる」はどちらも方向性をもつので差が出なかったようである。

さて、品詞のちがいとしても考えられるものに、自動詞と他動詞がある。これにあてはまる例は

027	生きる-死ぬ	A=1.48, B=1.57, T=1.53	< 025
025	生かす-殺す	A=2.10, B=2.11, T=2.11	

である。自動詞のほうが反対語らしさが強いが、今までの説明と同様に、他動詞は自動詞に「何か」がつけくわったものだからという考え方もあるが、ここでは「生かす」の反対語として「死なす」とか「死なせる」などが連想された可能性もある。

## 5-6 意味分野の構成要素とその体系

二つの構成要素だけで一つの意味分野が形成されている場合（二項対立と呼ぶこともある）には、一方の否定が他方になるという関係があり、反対語らしさが強くなる。では、三つ以上の構成要素を持つもの場合はどのような関係がそこにあるのだろうか。

まず、アンケートの中の二項対立の例を見てみよう。そのような例は9組含まれている。

026	裏－表	A=1.04, B=1.04, T=1.04
006	正－誤	A=1.14, B=1.08, T=1.11
005	有る－無い	A=1.09, B=1.13, T=1.11
048	赤字－黒字	A=1.12, B=1.20, T=1.16
097	内部－外部	A=1.19, B=1.24, T=1.22
056	異なる－同じ	A=1.51, B=1.38, T=1.45
089	承諾－拒否	A=1.48, B=1.42, T=1.45
028	男－女	A=1.44, B=1.50, T=1.47
027	生きる－死ぬ	A=1.48, B=1.57, T=1.53

全体にはほぼ反対語と考えられる。「裏－表」が最も典型的な反対語であるが、これは注意を要する面がある。質問文中で「意味が反対になる」例として出したのがこのペアだからである。それはともかく、この9組の中でも反対語らしさはちがっている。ということ、同じく「二つの構成要素だけで一つの意味分野が形成されている」といっても、それに加えてさらに個別の事情がはたらいっていることをうかがわせる。「裏－表」というのは、「方向が反対」という性質をもつ。「男－女」は、性の二区分であるが、遺伝子を調べた場合まれには間性や中性という人もいることがわかったり、性転換手術が行われたり、いろいろな事情があって、完全に二項対立になっているのではない。「生きる－死ぬ」にしても、「生きる」状態から「死ぬ」状態にはなれるが、その反対は不可能である。その点、状態変化は一方的であって、相互的ではない。それが反対語らしさの（わずかの）低さにつながっているのではないか。

このように、同じ二項対立といっても、その中には「中間的状态」が考えやすいものからそうでないものまで入っている点に注意する必要がある。

さて、次は三項以上の対立の例である。例は5組ある。いずれも三項対立と考えられるものの中から二つずつの組み合わせを作り、アンケートに入れたものである。反対語辞典などでは一つの語をひくと、他の二つの語が並んでいることが多い。

130	一人称－二人称	A=3.50, B=3.56, T=3.53	<163, <131
163	一人称－三人称	A=3.70, B=3.80, T=3.75	=131
131	二人称－三人称	A=3.79, B=3.77, T=3.78	

「一人称－二人称－三人称」の場合は、いずれも反対語ではないと判断されている。その中では「一人称－二人称」のペアがやや反対語的に位置づけられている。日常生活での経験で考えても一人称が意識の最も中心にあり、二人称がその次で、その二つだけで会話が成立することも多い。三人称はつけたしのようなものである。

008	液体－固体	A=3.33, B=3.18, T=3.25	<029, <007
029	気体－固体	A=3.42, B=3.48, T=3.45	<007
007	液体－気体	A=3.66, B=3.58, T=3.62	

「固体－液体－気体」の三項対立は、いずれもほとんど反対語と思われていない。そのうち、「液体－固体」の数値がやや反対語のほうになっているのは、われわれが日常

生活で「気体」に接し、それを知覚することが（液体や固体よりも）少ない、すなわち、「気体」を問題にすることが少ないため、意識しないのだろう。

009	海－陸	A=2.76, B=2.65, T=2.70	<010, <031
010	陸－空	A=3.06, B=3.09, T=3.07	=031
031	海－空	A=3.27, B=3.13, T=3.20	

「海－陸－空」の対立も反対語とは認識されていない。しかしながら、その中では「海－陸」がそれ以外よりもやや反対語的である。

032	赤信号－青信号	A=2.29, B=2.45, T=2.37	<033, <011
033	青信号－黄信号	A=3.86, B=3.88, T=3.87	<011
011	赤信号－黄信号	A=3.93, B=3.93, T=3.93	

交通信号の3色「赤信号－黄信号－青信号」の対立は「赤信号－青信号」がやや反対語として認識されており、黄信号はそのいずれとも反対語にはなっていない。一般に、赤と青が対立する例がいろいろあり（赤鬼－青鬼、赤葉－青葉、赤絵－青絵、赤らむ－青ざめる、赤金－青金、赤照る－青照る、赤電車－青電車、赤旗－青旗、赤み上戸－青み上戸）、色自体としても暖色と寒色という対立がある。黄色は交通信号以外では赤とも青とも対立をなさない。そのようなことが背景にあるだろう。

034	先輩－後輩	A=1.56, B=1.77, T=1.67	<012, <013
012	先輩－同輩	A=3.81, B=3.88, T=3.85	=013
013	同輩－後輩	A=3.86, B=3.77, T=3.81	

「先輩－同輩－後輩」も似たような例である。「先輩－後輩」という強い対立がある一方、同輩はいずれとも反対語を構成しない。

以上の例を総合していえることは、三項対立において、そのいずれの要素間にも反対語関係が成り立つということはないということである。「固体－液体－気体」のようにそれぞれが反対語意識がまったくなくなる（別の観点からは三者が相互に対立しているということ）場合もあるし、「先輩－同輩－後輩」のように、三項のうちの二項に強い対立があり、残りの一つがまるではじきだされるかのような形になる場合もある。他の三項対立体系も多かれ少なかれこの両者の中間的な様相をおびるであろう。

もっと構成要素が多い場合の例として曜日を見てみると、次のようになる。

064	月曜日－金曜日	A=3.98, B=3.94, T=3.96
-----	---------	------------------------

曜日は七つの要素から成り立つが、そのうちのウィークデイの最初と最後ということで、このペアを提示してみたが、このように、ほとんど反対語と意識されることはなかった。

同様の例としてテレビ局を見てみた。二つの民放局を提示した。

108	日本テレビ－フジテレビ	A=4.00, B=3.99, T=4.00
-----	-------------	------------------------

このように、まったく反対語とは意識されていない。これは、東京の場合の七つのテレ

ビ局が全体として緊密な統一体をもっているわけではなく、また、七つのテレビ局が同じレベルで関係付けられているわけでもない（1チャンネルと3チャンネルは同じNHKだし、それ以外は民放である）ということで反対語ではないと意識されたのだろう。

さて、意味分野がいくつの要素から構成されているのかよくわからない場合もある。そのような例もみておこう。

味をあらわす「あまい-からい-にがい」については、以下のようになる。

050	あまい-からい	A=1.97, B=2.30, T=2.14	<085, <051
085	あまい-にがい	A=2.70, B=2.62, T=2.66	<051
051	からい-にがい	A=3.65, B=3.70, T=3.68	

これらが味を表わすすべての形容詞だというわけではないのはもちろんのことである。

「しぶい」、「すっぱい」、「しょっぱい」などの重要な形容詞があるし、さらには「あまからい」とか「ほろにがい」のような複合語まで考えると、味を表わす言い方はもっとたくさんあるだろう。ここではそれらのうち、三つだけを取り上げたわけである。

結果は「あまい-からい」と「あまい-にがい」がやや反対語的で、「からい-にがい」は反対語ではなかった。これは、そのような味が人間にとって好ましいか（プラスか）好ましくないか（マイナスか）ということが関係しているだろう。「あまい」だけがプラスで、「からい」と「にがい」はマイナスであるから、プラスとマイナスのペアは反対語的になるというわけである。

次に、もう一つ、感情をあらわす名詞について見よう。

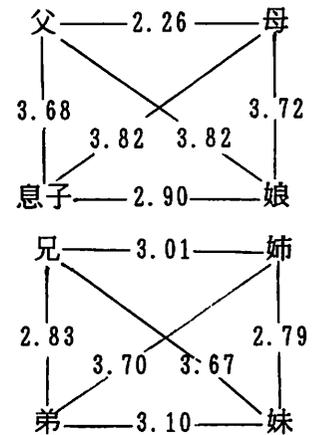
087	悲しみ-喜び	A=1.95, B=1.76, T=1.85	<052, <086
052	怒り-喜び	A=2.35, B=2.69, T=2.52	<086
086	怒り-悲しみ	A=3.44, B=3.49, T=3.47	

ここでも、プラスの感情「喜び」がマイナスの感情「悲しみ」と「怒り」にそれぞれ対立しているようすがわかる。この他の表現、「さびしさ」、「うれしさ」、「楽しみ」、「迷い」、「とまどい」などが一体どのような関係にあるかも興味深い問題だが、今回は扱わなかった。

## 5-7 二元的対立語の概念構造

ここで二元的対立語と呼ぶものは、二つの意味特徴の組み合わせで対立する四つの要素のことである。アンケートではそのようなものとして、性と世代とを組み合わせで2組の体系をたずねてみた。

077	父-母	A=2.24, B=2.28, T=2.26
114	息子-娘	A=2.84, B=2.97, T=2.90
078	父-娘	A=3.81, B=3.83, T=3.82
112	父-息子	A=3.68, B=3.67, T=3.68
113	母-息子	A=3.83, B=3.82, T=3.82
079	母-娘	A=3.71, B=3.72, T=3.72
115	兄-弟	A=2.84, B=2.82, T=2.83
122	姉-妹	A=2.82, B=2.76, T=2.79
117	弟-妹	A=3.09, B=3.11, T=3.10
148	兄-姉	A=2.95, B=3.07, T=3.01
149	弟-姉	A=3.67, B=3.73, T=3.70
116	兄-妹	A=3.61, B=3.73, T=3.67



これらのペアの相互の有意差よりも、その右側にあるこれらの構成する体系を見たほうが有意義だろう。いずれも上下の方向が世代差、左右の方向が性差をあらわしている。

「父-母-息子-娘」の体系では、「父-母」が最も反対語らしく（といってもその他のペアと比べて上での話しであって、数値自体はそれほどでもない）、次が「息子-娘」である。「息子-娘」は値からいうと反対語とはいえない程度のものである。最も反対語から遠いものは、「父-娘」と「母-息子」である。

「兄-弟-姉-妹」の体系では、最も反対語らしいのは「兄-弟」と「姉-妹」である（両者の数値に有意差はない）。次が「兄-姉」と「弟-妹」であり（この両者の数値にも有意差はない）、「兄-妹」と「姉-弟」は反対語ではない。

この結果はなかなか興味深い。第一に、二元的対立語は二つの意味特徴の対立で成立する関係だが、そのうちの一つの意味特徴で対立するペアは反対語と意識されても、二つの意味特徴ともに対立するペアは反対語ではないのである。すなわち、反対語というもの、多くの意味特徴を共有していて、たった一つの意味特徴だけで対立するものことである。

第二に、反対語関係を構成する二つの意味特徴のうち、一方が他方よりも重要であるということである。論理的には二つの意味特徴がある場合、それぞれで対立する反対語が考えられるから、反対語は二つあることになる。それが、「父」に対する「母」（性で対立）と「息子」（世代で対立）であり、「兄」に対する「姉」（性で対立）と「弟」（世代で対立）である。しかし、一般人の意識はそうではない。「父」と「母」は反対語であっても、「父」と「息子」は反対語ではない。また、「兄」に対しては、どちらかという「弟」が反対語であって、「姉」はそうではない。このようなことは、一見非論理的に見える現象だが、説明可能である。それは、反対概念が結合してできた単語の存在である。「父母」、「兄弟」、「姉妹」はよく知られた単語である。これに対し、「父-息子」、「母-娘」、「息子-娘」の間にはこのような単語は存在しない。「兄

姉(ケイ)」と「弟妹(テイマイ)」は、あまり使われない単語である。「父-母-息子-娘」の体系では性差の対立が世代差の対立より重要になっており、「兄-姉-弟-妹」の体系ではその反対に世代差の対立が性差の対立よりも重要になっているように見えるが、それはみかけだけのものであって、上述のような事情が働いているものと思われる。

### 5-8 文体による反対語意識の差

反対語というものは、意味が反対で品詞がほぼ一致しているだけが条件ではない。同じような文体的特徴を共有していることもまた大事である。そのところを次のデータで見てみよう。

				大きい-1.08-1.14-小さい
068	大きい-小さい	A=1.09, B=1.08, T=1.08		
123	大きい-小さい	A=1.14, B=1.14, T=1.14		
150	でっかい-ちっかい	A=1.47, B=1.37, T=1.42		
121	でっかい-小さい	A=2.16, B=2.05, T=2.11		
154	大きい-ちっかい	A=2.18, B=2.05, T=2.11		でっかい-1.42-ちっかい

同じ意味だが文体的特徴が異なる単語「大きい」と「でっかい」、「小さい」と「ちっかい」を組み合わせて提示してみた。すると、「大きい-小さい」と「でっかい-ちっかい」は反対語らしさが強く、「でっかい-小さい」と「大きい-ちっかい」は反対語らしさが弱いということになった。

以下に同様の例を示そう。

107	食べる-飲む	A=3.64, B=3.62, T=3.63	= 118
118	食う-飲む	A=3.61, B=3.56, T=3.59	
119	若者-年寄り	A=2.05, B=1.97, T=2.01	< 151
151	青二才-年寄り	A=3.36, B=3.24, T=3.30	
152	子供-大人	A=1.45, B=1.48, T=1.46	< 120
120	餓鬼-大人	A=3.13, B=3.08, T=3.10	

「食べる」と「飲む」は、それ自身反対語として意識されないもので、いい例ではなかったが、他の組は同じ文体的特徴をもつ場合は反対語で、そうでない場合は反対語でないという結果になった。

### 5-9 動作の反対性

動作をあらわす単語（典型的には動詞である）の場合、その動作に「反対性」がある場合がある。そういう場合、反対語らしさがいっそう強くなると考えられる。ここではそのような例を見ていくことにする。

016	上がる－下がる	A=1.07, B=1.09, T=1.08
017	のばす－ちぢめる	A=1.21, B=1.19, T=1.20
039	遠ざかる－近づく	A=1.26, B=1.33, T=1.30
038	あく－しまる	A=1.35, B=1.35, T=1.35

このように、多くの人はいくつかを反対語とみている。

さて、一般に反対語といわれるものの中には一つの動作を別の観点で見たものがある。それらは次のような結果になった。

088	勝つ－負ける	A=1.09, B=1.12, T=1.11
035	売る－買う	A=1.17, B=1.18, T=1.18
015	教える－習う	A=1.70, B=1.59, T=1.64
014	与える－奪う	A=2.18, B=1.96, T=2.07
037	受け付ける－申し込む	A=2.30, B=2.21, T=2.26
036	与える－取る	A=2.44, B=2.16, T=2.30

「勝つ－負ける」の 1.11 から「与える－取る」の 2.30 まで値はいろいろであるが、全体にだいたい反対語と意識されるようである。「勝つ－負ける」と「売る－買う」が反対語と受け取られるのには「勝負」と「売買」という単語の存在も関係していよう。「与える」の場合は「奪う」と「取る」の二つが反対語辞典に載っていたが、こういう場合はどうしても両方とも反対語らしくなくなるようである。「教える－習う」の場合、「教える－学ぶ」を連想した人もいただろう。そのような事情を考えると、それぞれのペアの反対語らしさの数値も納得できよう。

#### 5-10 単語レベルと句レベルと文レベル

反対語というのは本来「単語」レベルで考えられるものであるが、対立が語形という外形的なものでなく、「概念」という抽象的なレベルで考えられる以上、「句」や「文」レベルでも「概念の対立」が考えられるはずである。そこでアンケートではこの場合も「反対語」と呼ぶことにして、「反対語らしさ」についてたずねてみた。

まず、否定の場合である。否定の接頭辞「不」が付いた否定と「ない」が付いた否定とを比べてみよう。

157	必要－不要	A=1.38, B=1.31, T=1.35	< 165
165	食べる－食べない	A=2.16, B=1.94, T=2.05	

このように、「必要－不要」のペアのほうが「食べる－食べない」のペアよりも反対語らしいと判断される。やはり、「必要－不要」のほうが否定要素の結びつきが強いようであるが、通常反対語の研究の枠組みでは扱われない「食べる－食べない」も反対語と考えてよいというのは興味深い。この点で反対語の研究は否定の意味の研究とも結びつくものである。

次は、動詞と副詞（形容詞が連用修飾成分として使われる場合も含めてこう呼ぶことにする）の関係である。

155	歩く－走る	A=2.98, B=2.81, T=2.90	>153, <156
153	ゆっくり歩く－はやく歩く	A=2.61, B=2.19, T=2.40	<156
156	ゆっくり歩く－ゆっくり走る	A=3.67, B=3.51, T=3.59	
134	学校まで歩きました－学校まで走りました	A=3.53, B=3.40, T=3.47	
133	中学校に歩いて通いました－中学校に走って通いました	A=3.77, B=3.56, T=3.66	

「歩く－走る」の対立を基本と考えよう。このペア自体反対語かどうかわからないのであるが、それと比較すると、「ゆっくり歩く－ゆっくり走る」は反対語らしさが一層薄れてしまう。134や133のように、「歩く－走る」の対立が広い同一の文脈の中に置かれたときも、反対語ではないと意識される。対立する動詞に対して同じ副詞で修飾するのは対立を弱めると考えられる。一方、「ゆっくり歩く－はやく歩く」は「歩く－走る」よりも反対語らしさが高まる。動詞が同じで副詞が異なるわけであるが、これが反対語ということは、反対語は「基本的な意味に共通性があり、一部の本質的でない意味特徴において対立があるもの」であるということになる。

次は、能動態と受動態の場合である。

164	殴る－殴られる	A=2.58, B=2.44, T=2.51
137	田中君が加藤君を殴った－田中君が加藤君に殴られた	A=2.55, B=2.36, T=2.46
135	田中君が加藤君を殴った－加藤君が田中君に殴られた	A=3.47, B=3.51, T=3.49

単純な能動態と受動態のペア「殴る－殴られる」と比べると、137「田中君が加藤君を殴った－田中君が加藤君に殴られた」は反対語らしさの有意差がない（164=137）。両者はいずれもやや反対語意識があるという程度である。ところが、135「田中君が加藤君を殴った－加藤君が田中君に殴られた」になると、反対語とは意識されなくなる。この文は知的意味が同一である。このような例を考えると、「反対語」というものの対立の意識は「概念」レベルであるということだけでなく、その表現が指し示す現象そのものを我々がどう認識しているかという「世界観」にも関係してくるということがいえるようである。137の項目は「能動態－受動態」の対立というよりも、現実の世界でどちらがどちらを殴ったかということに関係しているのである。

そこで、このような現実の世界での動作の相互性を考える意味で次の例を見よう。

136	田中君が加藤君を殴った－加藤君が田中君を殴った	A=1.87, B=1.88, T=1.88
-----	-------------------------	------------------------

この文はかなり反対語の数値が小さく、反対語と考える人が多いことを意味している。

この文は動作者と被動作者を入れ替えただけであるが、これによって「動作の方向が反対」という例にあてはまり、反対語らしくなるのである。

138 田中君が加藤君の頭を殴った－田中君が自分の頭を殴った  
A=3.78, B=3.81, T=3.80

この文は殴った対象が自分の頭と他人の頭という違いがある。これは上の例と違って反対語とは認められない。「動作の方向が反対」という特徴がないからだろう。

次に使役態について考えてみよう。

132	殴る－殴らせる	A=3.43, B=3.34, T=3.38
143	林君が田中君に手紙を代筆させた －田中君が林君に手紙を代筆させられた	A=3.45, B=3.50, T=3.47
144	林君が田中君に手紙を代筆させた －林君が田中君に手紙を代筆させられた	A=2.63, B=2.47, T=2.55
145	林君が田中君に手紙を代筆させた －林君が田中君に手紙を自分で書かされた	A=3.39, B=3.01, T=3.20
146	林君が田中君に手紙を代筆させた －田中君が林君に手紙を代筆させた	A=1.97, B=2.06, T=2.01
147	林君が田中君に手紙を代筆させた －林君が自分で手紙を書いた	A=3.51, B=3.58, T=3.55

単純に動詞だけを提示した「殴る－殴らせる」はあまり反対語ではないと意識されている。受動態とはずいぶん反対語らしさがちがっている。その他に使役文と関連のありそうな文を示して反対語意識をたずねてみた。147のように自発性のあるものとの対比では反対語とは考えられないし、受動態のところで見たとように、知的意味が同一の143は反対語ではない。145は書き手が対立しているのだが、意味がとりにくい文になっているようだ。反対語ではないと考えられる。ここでやや反対語らしく見えるのは146である。これは(136と同じく)現実の世界で動作の方向が反対になる(動作者と被動作者とが入れ替わる)ため、反対語らしくなるのだろう。144は使役態と使役受動態の対立であるが、受動態のところの項目164や137と同じ反対語らしさになった(反対語らしさの有意差なし)。

次に「教える」と「習う」を含む文を考えよう。

015	教える－習う	A=1.70, B=1.59, T=1.64
139	先生が田中君に英語を教えた －田中君が先生に英語を習った	A=3.36, B=3.43, T=3.39 =140
140	佐藤君が田中君に英語を教えた －田中君が佐藤君に英語を習った	A=3.33, B=3.35, T=3.34 >141
141	佐藤君が田中君に英語を教えた －佐藤君が田中君に英語を習った	A=2.32, B=2.24, T=2.28 >142
142	佐藤君が田中君に英語を教えた －田中君が佐藤君に英語を教えた	A=1.97, B=1.98, T=1.98

すでに述べたように「教える－習う」は、それ単独では反対語ととらえられている。－

方、それを素直にあらわした文139と140は反対語とは意識されない。「先生」という人物を導入しても同じことである（有意差がない）。ところが、141となるとだいぶ反対語らしくなり、142はもっと反対語らしくなる。これらの文のペアに見られるのは「動作者と被動作者の逆転」という関係である。

これらをふまえて「教える－習う」を考えてみると、我々が反対語意識をもつのは、単語の「意味」を考えていることによるというよりは、その単語が表わす現実世界におけるモノ(referent)の関係によるのだろう。

### 5-11 空間的方向性の対立と反対語らしさ

すでに上で見てきたように、各ペアで何らかの意味で空間的な方向性の対立（反対方向）があると、反対語意識は強くなるようである。その点を確認してみよう。

128	左－右	A=1.11, B=1.21, T=1.16	<062, <161, <096
062	以前－以後	A=1.28, B=1.46, T=1.37	<161, <096
161	左辺－右辺	A=1.47, B=1.56, T=1.52	=096
096	以上－以下	A=1.65, B=1.59, T=1.62	

このうち、「以前－以後」は空間的な方向性というよりも時間的な方向性を表わすことが多いが一応ここで対比してあつかった。

これらの4項目を見ると、人々は確かにそれぞれのペアにはっきりした反対語意識をもっている。しかしながら、それぞれのペアの間には反対語らしさの数値に相当な差がある。これはなぜだろうか。これらの中では「左－右」が最も反対語らしい。ここにも「左右」という語の存在が影響していると考ええる。

空間的な対立にはもう一種類がある。それは軸の交差とでもいうべきものである。

061	縦－横	A=1.71, B=1.78, T=1.75	<063
063	緯度－経度	A=2.58, B=2.51, T=2.54	

この両者は、ペアの間の差が論理的には同じと見られるが、反対語らしさはちがっている。ここでも「縦横(ジュウワウ, ケイヨウ)」という語の存在が影響していると考えられる。「経緯」ということばもあるのだが、あまり一般的ではないし、経度と緯度という意味ではない。

### 5-12 一連のものの両端

時間的に連続するものの両端（の位置）に命名することがある。

094	始め－終わり	A=1.12, B=1.24, T=1.18	
060	入学－卒業	A=1.83, B=1.76, T=1.80	

このように、そういう場合は反対語らしくうけとめられる。

### 5-13 1対多の対立

1対多の対立は反対語辞典にはいろいろ載っている。その中から以下のようなペアを取り出した。「多」というのは「二」を含めて考えることにした。

124	往復-片道	A=2.47, B=2.50, T=2.48
058	一部-全部	A=2.44, B=2.56, T=2.50
092	一次元-多次元	A=2.77, B=2.56, T=2.66
160	一人-全員	A=2.80, B=2.87, T=2.84
098	片手-両手	A=3.19, B=3.29, T=3.24

このように、あまり反対語と意識されないことが多かった。

### 5-14 他の語による影響

アンケートの項目を考えると、形態が類似する他の反対語のペアに影響されて、もともとまったく反対語でないものに対しても反対語意識をもつことがあるのではないかと考えた。そこで、「大-小」を例として取り上げ、以下のようなペアを用意した。

100	大雨(材7M)-小雨(コ#M)	A=3.26, B=3.28, T=3.27
101	大金持ち-小金持ち	A=3.67, B=3.65, T=3.66
111	大豆(タ'イ')-小豆(アズ'キ)	A=3.83, B=3.82, T=3.83
065	大学生-小学生	A=3.87, B=3.83, T=3.85
076	大腸-小腸	A=3.89, B=3.85, T=3.87

これらはいずれも反対語と意識されていない。当初の仮説はまちがっていたようである。

### 5-15 類義語と反対語

すでに見てきたように、反対語は類義語と似た性質をもっている。多くの意味特徴が一致していて、たった一つの意味特徴で対立している場合が反対語と考えられるからである。そこで、類義語のペアを提示してみた。ここで類義語というのは、語構成上、形容詞性の修飾語と名詞性の被修飾語とが結合している形のもので、被修飾語の部分が一致し、修飾語の部分で対立をなしているものを考えた。

082	怒り肩-なで肩	A=2.45, B=2.40, T=2.42
041	機械工業-手工業	A=2.59, B=2.64, T=2.62
	(<019 機械-手	T=3.46)
021	激痛-鈍痛	A=3.30, B=2.99, T=3.14
022	生き恥-死に恥	A=3.36, B=3.32, T=3.34
	(>027 生きる-死ぬ	T=1.53)
081	飲料-食料	A=3.64, B=3.64, T=3.64
	(=107 食べる-飲む	T=3.63)
084	本名-あだ名	A=3.71, B=3.59, T=3.65
099	うすみどり-ふかみどり	A=3.68, B=3.67, T=3.67
129	馬づら-猫づら	A=3.84, B=3.82, T=3.83
044	月利-年利	A=3.94, B=3.79, T=3.86

このように、その多くが反対語とは意識されない。修飾語の部分だけをたずねたものがかっこの中に入れて示したが、それとの関連はあまりなさそうである。したがって、反対語の意識というものは表現全体（ないし、その表現があらわす現実の世界でのできごと全体）に関連するものであって、それを言語形式の観点から区切って考えることはできないということになる。

なお、5-14で述べたことの一部もここに関連する。

### 5-16 動作の順序性

時間の観点から見て、ある動作の次に別の動作がくる場合、その両者は反対語と意識されることがある。そのような例を見てみることにしたい。

059	質問-回答	A=1.63, B=1.74, T=1.69
054	覚える-忘れる	A=1.65, B=1.87, T=1.76
045	結婚-離婚	A=1.84, B=2.08, T=1.96
080	決算-予算	A=2.37, B=2.42, T=2.39
043	開票-投票	A=3.67, B=3.38, T=3.52

このようにペアによってさまざまな値を取る。ということは、動作の時間的な順序性は、それだけでは反対語意識と直接関係しないといえよう。

では、上のペアで反対語と意識されているものは一体なぜそのように意識されているのだろうか。059、054、045の3組に共通するものとして、表面にはでてこないものの、空間的な動作の方向の反対性を仮定したい。「質問-回答」は質問者と回答者の間でまさに反対方向にことばがかわされる。「覚える-忘れる」の対立は、頭の中に入っていくことと、それが頭の中から出ていくことである。「忘れる」は記憶が消えることというとならえかたもあるが、「覚える-忘れる」には「右の耳から入って左の耳から出ていく」というとならえかたがあることは確かである。

### 5-17 その他の反対語ペアについて

アンケートではその他にもたくさんの項目があった。それらを見ておこう。

066	集中-分散	A=1.39, B=1.41, T=1.40
018	天-地	A=1.43, B=1.51, T=1.47
090	動く-止まる	A=1.56, B=1.50, T=1.53
049	理想-現実	A=1.68, B=1.90, T=1.79
159	てきぱき-のろのろ	A=1.84, B=1.76, T=1.80
091	一般-特殊	A=1.85, B=1.91, T=1.88
125	一定-不定	A=1.95, B=1.84, T=1.90
004	愛護-虐待	A=2.01, B=2.03, T=2.02
093	自分-相手	A=2.17, B=2.08, T=2.13
047	公共心-利己心	A=2.03, B=2.28, T=2.15
030	朝-晩	A=2.24, B=2.13, T=2.18
158	一見-熟視	A=2.49, B=2.25, T=2.37

042	近日点－遠日点	A=2.47, B=2.41, T=2.44
127	合流－分流	A=2.46, B=2.53, T=2.50
046	迂回－直行	A=2.47, B=2.56, T=2.52
057	兼業－専業	A=2.52, B=2.69, T=2.60
055	残る－消える	A=2.85, B=2.66, T=2.76
126	ちょっと－じっくり	A=2.95, B=2.98, T=2.97
067	貴族－平民	A=3.24, B=3.34, T=3.29
083	都市－近郊	A=3.41, B=3.39, T=3.40
040	盆－暮	A=3.40, B=3.50, T=3.45
020	月食－日食	A=3.54, B=3.45, T=3.50
162	氏(ウジ)－育ち	A=3.52, B=3.55, T=3.54
073	壁－塀	A=3.86, B=3.87, T=3.86
075	本－ブックカバー	A=3.96, B=3.90, T=3.93
110	くずかご－ティッシュ	A=3.93, B=3.92, T=3.93
074	テレビ－ラジオ	A=3.95, B=3.93, T=3.94
109	扇風機－クーラー	A=3.95, B=3.93, T=3.94

これらのうち、反対語らしさの数値が大きい（反対語らしくない）ものは、対になって使われることはあっても、対比の意味をほとんど持たないものである。

また、数値が 2.0 以下の「反対語らしい」ペアは、「天－地」以外は）何らかの意味で対比効果があり、「二つで一つの意味分野を構成する」に近いものである。「天－地」は「天地」として一語の形で使われることがあることが大きく影響していよう。

結局、これまでに述べてきたような観点でそれぞれの「反対語らしさ」は説明できるように思う。

## 5-18 項目間の関連

それぞれの項目について「それが反対語だ」と答えた人の反応パターンをもとに、数量化3類を適用して、項目間の判断の関連を探ることができる。また、それがどのような人の判断によるものかも調べられる。

また、「反対語らしさ」の数値 1、2、3、4 が間隔尺度の数値としてほぼ妥当なものであるということから、この数値全体を因子分析にかけることも可能である。

いずれの結果も、「反対語らしくない」ペアが相互に相関が高く、ひとつに固まる傾向がつかめる。すなわち、そのような「特殊な」ペアでも反対語と考える人はそれなりにグループを形成しているということである。

このような手法によって、個人ごとに見た場合の項目間の関連がつかめるのだが、ここでは詳細を省略する。

## 6 反対語の想起

ここでは、アンケートのPART2のデータの分析を行う。PART2では、Aバージョンの人とBバージョンの人とで質問内容が違っており、ほぼ、反対語に相当するペアをそれぞれに提示した。ここでは、AバージョンとBバージョンとで違いがあるかないかを中心にわかったことを述べよう。

なお、「正しい」解答が何かというのはむずかしい問題である。一応、現在刊行されている各種の反対語辞典などの記述を参考にしたが、何とも結論は出しにくい。

### 6-1 安定した反対語

まず、どちらのバージョンも互いを反対語として答えている場合を見てみよう。ここでは9割(120人)以上の一致を示すものだけを取り上げることにする。

A-02	赤字→	132	黒字	1	NR		
B-02	黒字→	130	赤字	2	白字	1	NR
A-03	裏→	133	表				
B-03	表→	132	裏	1	NR		
A-05	売る→	129	買う	4	NR		
B-05	買う→	129	売る	2	買わない	1	NR
A-09	危険→	133	安全				
B-09	安全→	129	危険	3	NR		
A-16	善人→	129	悪人	2	悪い人	2	NR
B-16	悪人→	128	善人	3	良人	2	NR
A-18	年末→	128	年始	1	NR		
B-18	年始→	122	年末	2	大みそか	2	年終 5 NR
A-19	本店→	121	支店	11	NR		
B-19	支店→	124	本店	8	NR		
A-20	無害→	130	有害	2	毒		
B-20	有害→	129	無害	3	有益	1	NR
A-21	浅い→	132	深い	1	NR		
B-21	深い→	131	浅い	2	NR		
A-22	明るい→	131	暗い	2	陰気		
B-22	暗い→	132	明るい	1	NR		
A-28	寒流→	131	暖流	2	NR		
B-28	暖流→	128	寒流	3	NR		
A-30	着る→	132	脱ぐ	1	NR		
B-30	脱ぐ→	132	着る	1	NR		

上の表示形式において、左端がバージョン名、ハイフンの次が項目番号、次が提示した単語（刺激語）、矢印の次が回答数順に並べた答（反応語）である。各語の直前の数値はその語形を答えた人数（＝回答数）である。一人だけが答えたものは省略した。NRは、わからない、空白、？、ない、判読不能などを含む。

これらはほとんど問題のない、安定した反対語と考えていいだろう。こういう項目は他の回答が少ないだけでなく、NRが一般に少ない。反対語中の反対語である。

中には勘違いのようなものも含まれており、「黒字－白字」などは、経済用語でなく、文字通りの色彩名称＋文字とうけとられたのかもしれない。

なお、反対語辞典の記述でも、ここでの回答と一致することが多いが次のような例がある。

B-03 表→裏・奥・内・中  
A-18 年末→年始・年頭・年初  
A-19 本店→支店・分店・出店

## 6-2 かなり安定した反対語

ここでは、両バージョンとも6割以上（80人以上）の回答の相互の一致を示すものを取り上げよう。

A-04	生き別れ→	82	死に別れ	8	死別	5	再会	2	めぐりあい	2	出会い	29	NR
B-04	死に別れ→	98	生き別れ	3	再会	3	出会い	25	NR				
A-07	開放→	101	閉鎖	7	束縛	4	拘束	2	密閉	2	閉	9	NR
B-07	閉鎖→	92	開放	5	開	3	解放	3	開門	3	開鎖	2	公開
		2	解禁	2	開場	13	NR					2	開封
A-08	合唱→	116	独唱	4	斉唱	8	NR						
B-08	独唱→	118	合唱	4	斉唱	3	りん唱	7	NR				
A-13	後退→	130	前進										
B-13	前進→	111	後退	19	後進	2	NR						
A-17	短縮→	89	延長	13	伸長	10	拡張	5	拡大	3	長伸	9	NR
B-17	延長→	101	短縮	2	中止	20	NR						
A-24	異常→	113	正常	10	平常	4	普通	3	通常				
B-24	正常→	132	異常	1	NR								
A-32	高額→	107	低額	10	少額	5	安価	3	小額	6	NR		
B-32	低額→	130	高額	3	NR								
A-34	下書き→	95	清書	19	正書	2	精書	11	NR				
B-34	清書→	88	下書き	5	乱筆	3	練習	3	かい書	2	原稿	2	草稿
		2	落書き	25	NR								
A-39	非凡→	128	平凡	3	NR								
B-39	平凡→	106	非凡	6	特殊	2	個性的	2	天才	2	奇抜	10	NR

これらもだいたい安定した反対語であるが、各項目ごとにそれぞれの事情があってこのような結果になったものであろう。

「生き別れ－死に別れ」では、NRの数が多く、反対語が想起できなかったようすがうかがえる。また、「再会」が両バージョンにでていることが注目される。

「合唱－独唱」でも「斉唱」が両方に出ている。反対語辞典でもそうなっているものがある。

「前進－後退」では、「前進」の反対語として「後進」をあげた人が19人もいたことが正解率を下げた。反対語辞典でも、「前進－後進」を認めるものが複数ある。「後進」の反対語は「先進」と考えられる場合が多い。

「異常－正常」では、「異常」の反対語に「平常、普通、通常」などがあげられている。これらの反対語は「不時、特別（特殊）、非常」あたりになろう。「反対語の反対語」が元の単語になるかどうかを考えればよかった。

「高額－低額」では、「高額－小額」という、もう一つの反対語ペア（これは反対語辞典で確認できる）の存在が影響している。「少額」は「多額」の反対語と考えられるが、「小額」と同音なので混乱が起きたのだろう。

「下書き－清書」では、「正書」とか「精書」とかいう誤字を書いた人がいることもあって、このような結果になった。それだけでなく、A・Bバージョンともに、NRが比較的多い項目であった。

反対語辞典の調査では、本文中で述べたもの以外で、次のものに反対語が複数認められている。 B-07 閉鎖→開放・開設 B-39 平凡→非凡・奇抜・偉大

以上のようないろいろな問題はあがるが、これらの反対語は一応反対語らしいものと考えることができよう。

### 6-3 方向性がある反対語

反対語として一方から他方が想起できても、逆方向はなかなかそうできない場合がある。ここではそんなものを見てみよう。

A-10 共学→	56 別学	18 男子校,	女子校	8 独学	4 女子校	44 NR
B-10 別学→	90 共学	10 同学	2 生学	2 独学	27 NR	
A-31 欠勤→	125 出勤	2 皆勤	3 NR			
B-31 出勤→	32 帰宅	31 欠勤	28 退社	9 退勤	4 退出	22 NR
A-33 答え→	55 質問	48 問い	21 問題	9 NR		
B-33 問い→	119 答え	5 解答	4 質問	4 NR		
A-36 出す→	77 入れる	13 ひっこめる	11 しまう	7 受けとる	6 引く	
	3 入る	2 もどす	2 出さない	10 NR		
B-36 入れる→	117 出す	8 抜く	2 取り出す	2 取る	2 NR	

「別学」の反対語はといわれれば「共学」がすぐ出るのに、「共学」の反対語はというと「別学」が出てこない。システムとしての「別学」でなく、具体的な学校を指す「男子校」とか「女子校」などがでてくる。これは回答者の語彙力の問題もあるかもしれない。なお、反対語辞典のうち3種がこの見出しを載せていない。

「欠勤」の反対語は「出勤」で安定しているのに、「出勤」の反対語は「帰宅、欠勤、退社」などとさまざまである。「退勤」などは「～勤」の部分が共通だから反対語と意識されるのかもしれない。なお、三省堂国語辞典は「退勤」を反対語として認めている。

「問い」の反対語は「答え」と出るが、「答え」の反対語というと「質問」が多く、「問い」は少なくなる。「問い」の反対語として一部「解答、回答」がでているのとながる現象である。「問い」と「答え」は、両方とも和語動詞の連用形からできているという共通性はあまり重要視されていない。

「入れる」の反対語は「出す」なのに、「出す」の反対語は「入れる」と答えた人が少なく、「ひっこめる、しまう、受けとる、引く」などのさまざまな言い方がでてきた。

「問い－答え」と「入れる－出す」では、動作の起こる順序が影響しているとも考えられよう。動作の起こる順序に反対語を想起しやすいということである。

#### 6-4 ずれている反対語

Aバージョンの回答とBバージョンの回答がずれる場合もあった。ここではそのようなものを取り上げよう。

A-26	落とす→	94 拾う	13 上げる	2 持ち上げる	2 落ちる	16 NR
B-26	拾う→	102 捨てる	26 落とす	5 NR		
A-35	心配→	117 安心	2 歓喜	9 NR		
B-35	安心→	106 不安	19 心配	2 恐怖	6 NR	
A-37	冷たい→	72 暖かい	47 熱い	6 温かい	2 暑い	4 NR
B-37	熱い→	123 冷たい	7 寒い	2 NR		

「落とす」の反対語は「拾う」、「拾う」の反対語は「捨てる」となることが多い。ここでも動作の順序性が影響していると考えられる。なお、「落とす」の反対語として「上げる」と答えた人もかなりいるが、反対語辞典の調査でも「上げる」が挙げられている例が複数ある。また、反対語辞典でも「拾う」の反対語は「落とす」と「捨てる」の両方が認められるようである。

反対語辞典の調査によれば、「安心」の反対語はサ変語幹としての「心配」と形容動詞としての「不安」の二つあると考えるとよい。そのうち、一般に「不安」のほうを強く想起するらしい。文字の影響かもしれない。

「熱い」の反対語は「冷たい」だが、「冷たい」の反対語となると、「暖かい」と「熱い」とに分かれる。「温かい」もあるが、これは「暖かい」と同義語と考えておく。結局、「冷たい-熱い」と「冷たい-暖かい」という二つの反対語のペアがあると考えられる。これについては渡辺[13]の論考もある。反対語辞典によって、このあつかいはさまざまであり、「冷たい」には「暖かい(温かい)」と「熱い」の両方を認めるものが多い。また、「熱い」の反対語には、「冷たい」の他に「ぬるい」を挙げるものが複数ある。

### 6-5 不安定な反対語

一方、お互いにお互いを想起することがむずかしいペアもある。

A-11	苦しい→	80	楽しい	16	楽	4	楽だ	4	楽な	3	やすらか						
		2	苦しくない	17	NR												
B-11	楽しい→	44	苦しい	37	つまらない	24	悲しい	5	楽しくない	4	つらい						
		3	哀しい	2	つまんない	8	NR										
A-29	逆風→	72	順風	23	追い風	7	正風	4	向風	4	送風	3	直風	20	NR		
B-29	順風→	79	逆風	4	強風	4	突風	2	向かい風	2	波乱	2	乱風	31	NR		
A-38	否認→	62	是認	35	承認	8	容認	5	肯認	5	公認	5	肯定	2	承諾	5	NR
B-38	是認→	78	否認	15	非認	13	否定	3	拒否	2	拒絶	15	NR				

ここに提示した三つのペアは、その中ではかなり相互に反対語と考えられるものである。一般人の発想は反対語辞典を越える場合がある。

「苦しい」の反対語は「楽しい」で、かなりの一致を見せるが「楽しい」の反対語は「苦しい」だけでなく、「つまらない」とか「悲しい」とかも考えられている。反対語辞典では「楽しい」の反対語に「苦しい」と「悲しい」を挙げるものが多い。

反対語辞典によれば、「逆風-順風」、「向かい風-追い風」が反対語とされている。逆風と向かい風は同義語であるし、順風と追い風も同義語である。にもかかわらず、反対語のくみあわせが固定しているのは語種の一致を考慮してのことだろう。ここでは「逆風」の反対語として「追い風」が多く答えられた。また、「逆風」、「順風」ともにNRが多いことは、この2語があまり知られていないこともうかがわせる。

「否認」の反対語としてはさまざまなものがあげられている。「是認」が最も多いが「承認」もずいぶん多い。反対語辞典では「承認」の反対語は「拒否」となっているが、おそらく「是認」という語自体にあまり親しみが無いのだろう。

以上のようなものは、一応反対語として考えられるが、一般人の間ではその意識がやうすいと考えられるものである。

これに対して、以下のようなものは反対語と考えること自体に難がある場合もありそ

うである。

A-01 合う→	48 合わない	14 ちがう	12 離れる	9 別れる				
	7 ずれる	3 はずれる	2 異なる	29 NR				
B-01 離れる→	60 近づく	27 くつつく	9 合う	6 付く				
	5 近寄る	3 着く	2 集まる	2 合体する				
	10 NR							
A-06 大学生→	29 社会人	28 小学生	4 浪人生	3 浪人	3 教授			
	2 幼稚園生	58 NR						
B-06 小学生→	38 大学生	7 大人	5 中年	4 中学生	4 先生			
	3 小学生でない人	2 社会人	2 非小学生	66 NR				
A-12 原則→	68 例外	3 細則	3 自由	2 特別	2 反則	2 変則	2 規則	
	41 NR							
B-12 例外→	25 一般	23 原則	5 例	4 通例	3 規則	2 普遍	2 普通	
	2 法則	45 NR						
A-14 さげぶ→	46 ささやく	36 だまる	8 つぶやく	37 NR				
B-14 ささやく→	48 さげぶ	48 どなる	6 わめく	3 騒ぐ	2 大声を出す			
	21 NR							
A-15 借金する→	36 金を貸す	18 貸金する	11 返金する	9 返済する	9 貸す			
	5 貸	5 融資する	4 貸与する	28 NR				
B-15 返金する→	62 借金する	11 送金する	7 入金する	3 納金する	3 支払う			
	3 徴収する	2 受領する	2 集金する	2 貸金する	2 送金			
	29 NR							
A-23 いきいき→	20 ぐったり	9 しょんぼり	9 じめじめ	4 しょんぼり				
	3 だらだら	3 しょぼしょぼ	2 しにしに	2 うだうだ				
	2 うじうじ	2 もんもん	2 めそめそ	2 くらい				
	2 生気のない	2 どんより	53 NR					
B-23 ぐったり→	22 いきいき	19 ぴんぴん	12 はつらつ	11 しゃっきり				
	8 元気	4 しゃきしゃき	4 すっきり	3 しっかり				
	2 しゃきっと	2 ピンピン	33 NR					
A-25 海→	59 陸	26 山	18 空	27 NR				
B-25 陸→	88 海	19 空	2 海, 空	2 陸でない	18 NR			
A-27 形→	15 無形	11 影	8 無	7 色	4 内容	4 中身	4 中味	
	4 質	3 点	62 NR					
B-27 影→	57 光	16 白なた	11 形	6 実体	5 本体	3 陽	2 表	27 NR
A-40 明白→	43 不明	26 あいまい	11 暗黒	3 こんとん	3 あやふや			
	3 疑惑	2 不明瞭	33 NR					
B-40 不明→	37 明白	36 明確	14 明瞭	6 判明	4 明快	3 明解	3 明らか	
	3 鮮明	2 確実	2 発見	16 NR				

「合う」の反対語は一般人には考えることがむずかしいらしい。「合わない」という否定形が最も多く出てきた。また、「離れる」の場合も「近づく」とか「くつつく」とかが出てきており、「合う－離れる」はほとんどの反対語辞典には書いてあっても通常は意識されないようである。

「大学生－小学生」は反対語ではない。反対語辞典ではどこにも見出しになっていない。このようなものを提示されたときにどのような反応があるのかと思って入れてみた

が、結果はNRが多くなるということになった。

「原則－例外」はNRがそれぞれ40以上もあり、一般には反対語とは考えられていないものである。反対語辞典では見出しになっていないものも一部にあるが、なっていれば「原則－例外」で一致している。

「さけぶ－ささやく」の場合、「さけぶ－だまる」とか「ささやく－どなる」とかの有力な反対語ペアがある。反対語辞典でも「さけぶ－ささやく」だけでなく「さけぶ－わめく」を認めるものが多い。

「返金」はまだ「借金」を連想できるが、「借金」というと何だかわからなくなってしまふようだ。少なくとも「返金」を思いついた人はあまりいないといえる。「金を借りる」の反対だからということで「金を貸す」という句が答えられたのだろう。これがサ変語幹で表現できたら反対語の資格充分だった。第2位に出てくる「貸金(かき)

「貸したお金」の意味であって、「貸金(かき、たいき)する」という言い方はない。「借金」の反対語は何かという質問なら、これを「借りたお金」の意味と解して「貸金」でもよかった。反対語辞典では「借金する」のかたちがなく、「借金」だけがあった。

「いきいき－ぐったり」は(反対語辞典では認められていることが多いが)反対語とは考えにくい。NRが多く、回答が分散している。

「陸」と「海」についてはPART1でも扱った。「陸」と「海」はまあまあ反対語と思われる。これはPART1の結果と一致する。しかし、「陸」の反対語は「海」が多く、「空」はかなり少ないが、「海」の反対語は、「陸」が多いものの、「山」というのがかなり出現する。たしかにレジャーなどで対比的に使われることも多いようである。反対語辞典でもこの項目は扱い方がさまざまである。

「形－影」は反対語とは思われていないようである。「形」の反対語は「無形」、「影」の反対語は「光」が最も多い。また、「形」の反対語はNRが62もあった。反対語辞典をみると、見出しがないものもずいぶんある。

「明白－不明」もはっきりしない。それぞれがお互いの反対語として意識される場合が最も多いのだが、他にも有力な言い方がずいぶんある。反対語辞典ではこのペアを載せるのもあるし載せないのもある。

## 6-6 反対語の想起のまとめ

以上の結果を見ると、次のようなことが言えると思われる。

(1) 反対語意識が安定している(大多数の人が認める)ものもあるが、人によって反対語意識が相当ちがっている場合もある。

(2) 反対語には方向性がある。すなわち、一方から他方が反対語として想起されても、その逆は必ずしも成り立たないということである。反対語が別の語につながることもあるし、当該の語の反対語が何かわからなくなってしまうこともある。

## 7 まとめ

ここまでの調査でわかったことをまとめてみよう。

結論の一つは、反対語ないし反対関係というものは明確に定義できるものではないということである。なぜならば、反対語ないし反対関係というものは「言語意識」の一つであるからである。現実にもそのようなものが存在するというわけではなく、そのようなものがあると「我々が」考えているだけである。意識である以上、当然個人差があり、はっきりしない部分が多くなる。

湯川[14]は、すべての意味関係（同義関係・包括関係・反義関係・同一意味分野所属関係）が言語外的な現実世界の側の問題であるとしている。そこまでいうのは極端かもしれないが（たとえば、「しかし」と「けれども」の同義性は「現実世界」の問題というだけではないのではないか？）、反義性については湯川のように考えてもよいと思う。

「意味が反対」というと一般の人には理解される（ことが多い）が、それが十分な定義にはならない。「反対」の意味が不明確だからである。宮地のいうように「対義」という考え方がよさそうである。つまり、意味が対をなしているというわけである。

何と何が対をなすかは、その言語（というよりも文化全体）によって定まっているものである。したがって、反対語を調べるというのは、実はその言語に反映した世界観を調べていることにもなるのである。

意味論では成分分析という考え方がある。それによれば、多くの語が他の語との対比でもってその意味が規定されると考えられる。そこにいろいろな意味特徴というものを認めることもできよう。しかし、そのような複雑な意味特徴は、意味論的観点からは正しいかもしれないが、一般人の意識とは違っていることもある。ある意味特徴のみが強く意識されることがあるのである。そこに一般人の「対比」意識があり、反対語が意識されると考えられるのである。

反対語の分類について考えれば、意味の種類によって反対語意識が特徴付けられるという面があることが指摘できよう。モノを表す語（典型的には名詞）は、referent が存在することが多いので、二つで何か一つのまとまりをなすものがあると一方の否定が他方になり、反対語と意識されるようになる。サマを表す語（典型的には形容詞）はある

ものがどんなだと表現する働きがあり、それがあるスケールによって考えられる場合が多く、また程度性と関連付けられることも多いから、反対語らしくなる。動作を表す語（典型的に動詞）は、その動作の方向が逆ならば反対語と意識されやすい。動作の方向は現実の世界で反対でなくとも、何らかの意味で（抽象的でも）反対ならばそれでよい。また、元に戻すような動作や復元する動作もある意味で反対語と意識されることが多い。

ここで述べてきた反対語は日本語に関するものであった。これと同じ内容の調査を他の言語で行うとどうなるかは興味深いテーマである。今後の課題の一つにしたい。

以下には、本稿で述べてきたことを箇条書きの形で列挙しておくことにする。

- 反対語といわれるものの中にはいろいろなものが雑多に入っている。
- 反対語は類義語である。
- 反対語には方向性があり、一方から他方が想起しやすくても、その反対が想起しやすいとは限らない。
- 反対語意識には個人差があり、一般に女のほうが反対語意識が鋭い。
- 形容詞性概念の場合には、形容詞の形で並んだ場合が反対語らしく見える。漢字一字の語基だけを提示すると、反対語らしさはわずかながら減る。
- 二項対立をしているペアははっきりと反対語だと意識されている。
- 三項対立のグループのそれぞれの要素間は反対語らしくない。また、それらのうちの一つのペアに強い反対語意識がみられることがある。
- 二元的対立語（二つの意味特徴で対立する四つの要素）の場合、一つの意味特徴で対立するペアは反対語だと意識されるが、二つの意味特徴で同時に対立する語は反対語ではない。また、それぞれの意味特徴は重要性が違っている。
- 反対語らしさは、当該の反対語を組み合わせて作った複合語が存在するかどうかと関連する。
- 文体的特徴が一致する場合のほうが、そうでない場合よりも反対語らしいと意識される。
- 動作自体に反対性があると、反対語らしいと意識される。
- 「反対語」は単語レベルだけでなく、句や文のレベルでも考えられる。
- 反対語は否定や受動などとも関係する。
- 現実の世界で動作の相互性があると考えられるものは、反対語らしさが強い。
- 反対語という関係は、単語の意味関係というより現実の世界でのモノの関係である。
- 空間的な方向性の対立があるものは、反対語らしさが強い。

- 時間的に一連のものの両端に命名したものは、反対語らしさが強い。
- 1対多の対立はあまり反対語らしくない。
- 他の語のささえによる反対語というものはほとんどない。
- ペアの語構成が修飾部＋被修飾部となっていて、被修飾部が一致し修飾部で対立しているようなペア（類義語）は、それだけでは反対語と意識されることは少ない。反対語意識はその表現全体（およびそれが指し示すもの）に関連する。
- 動作の順序性は、それだけでは反対語意識と関連しないが、反対語の想起の場合は、提示語に対して後に位置する動作を表わす語を答える場合が多い。

## 謝辞

データの収集にあたっては、東京外国語大学の井上史雄氏、明治学院大学の外池滋生氏、東京学芸大学の野口裕之氏（現在名古屋大学）にお世話になった。聖心女子大学も野口裕之氏のおかげでデータが集められた。ここに記し、謝意を表する。

## 補記

本稿は、かなり以前に日本言語学会で行なった口頭発表[1]を基に、その後、別稿[2]に載せた部分を削除し、現在の段階で改めて考察を加えて改訂したものである。執筆は荻野が担当した。

## 参考文献

- [1]荻野綱男・野口美和子(1986.10)「反対語意識のしくみ」日本言語学会第93回大会
- [2]荻野綱男・野口美和子(1988.3)「辞書における反対語記述の問題点」『ソフトウェア文書のための日本語処理の研究－9——I P A L (Basic Verbs)をめぐって——』情報処理振興事業協会, pp.119-171
- [3]福島邦道(1987.6)「私の対義語論」日本語学Vol.6 No.6
- [4]森岡健二(1987.6)「私の対義語観」日本語学Vol.6 No.6
- [5]森重敏(1987.6)「共義的対義 考察のすすめ」日本語学Vol.6 No.6
- [6]田中章夫(1987.6)「対義構造の性格」日本語学Vol.6 No.6
- [7]村木新次郎(1987.6)「対義語の輪郭と条件」日本語学Vol.6 No.6
- [8]毛利可信(1987.6)「対義語、類義語・類縁語」日本語学Vol.6 No.6
- [9]河上誓作(1987.6)「対議と否定」日本語学Vol.6 No.6
- [10]荻野綱男(1980.3)「敬語における丁寧さの数量化」国語学第120集
- [11]荻野綱男(1984.10)「敬語表現の段階付けの妥当性」国語学会昭和59年度秋季大会  
→井出祥子他(1986.12)『日本人とアメリカ人の敬語行動』南雲堂, pp.218-227に同趣旨のものが含まれている
- [12]坂元慶行・石黒真木夫・北川源四郎(1983.1)『情報量統計学』共立出版
- [13]渡辺実(1970.11)「語彙教育の体系と方法」森岡健二他(編)『講座 正しい日本語 第4巻 語彙編』明治書院
- [14]湯川恭敏(1973.9)「意味論の諸問題」アジア・アフリカ言語文化研究No.6

(おぎの つなお・東京都立大学助教授／のぐち みわこ・所属なし)